

日本論語研究会 第46回

日時：平成21年2月21日(土) 16時30分～18時

場所：慶應義塾大学 大学院校舎1階 311号室

講師：田村重信（日本論語研究会代表幹事）

「継続することが目的－5年目を迎えた日本論語研究会」

（己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ）

今日も満員になりましたね。本当にありがとうございます。

日本論語研究会、46回を迎えたわけでございます。これから始めるわけでございますけれども、いつものように、日本論語研究会の予定でございますが、今日は、2月21日、私がお話しします。

それから次回の3月14日でございますが、安岡正篤先生のお孫さんでございます安岡（溝本）定子さんに、「祖父・安岡正篤とこども論語塾」というタイトルでお話しをいただきます。4月18日には、非常に由緒のある、著名な方でございますけれども、四條家の食文化協会、旧華族・侯爵家 四條中納言山陰嫡流四條司家第四十一第当代 NPO 法人 四條司家食文化協会 理事長 四條隆彦さんにご講演いただきます。

四條さんは、小学館文庫から『四條司家直伝 日本料理作法』という素晴らしい本を出しておられますけれども、食文化、日本の料理、そういった問題について、特に陰陽五行説、そういうものと絡めてお話しをしていただくということになりますので、今後ご期待したいと思います。

それでは、いつものように、論語を皆さんと一緒に声を出して読んでいきたいと思いません。

それじゃ、一緒にいきましょう。はい。

子質問いて曰く、「一言にして以て終身之を行ふべき者有りや。」と。

子曰く、「其れ恕（じょ）か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。」と。

もう一度いきましょう。

子質問いて曰く、「一言にして以て終身之を行ふべき者有りや。」と。

子曰く、「其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。」と。

ということですが、これは非常に有名な言葉です。己の欲せざる所は人に施すこと勿かれということですが、実はこの言葉をこの研究会で繰り返しやっています。これで3回目ですが、私は、この言葉が好きで、とても良い言葉だと思っています。

この訳ですが、子貢が孔子に、「たった一言で、言うことのできる、生涯を通じて実践すべきようなことはありますか」と。一言で、どういうふうに行っていたらいいでしょうかと尋ねたんですね。そうすると孔子さんが、それは「恕」だと。恕というのは思いやりという言葉だということなんです。恕とは、自分が人からされたくないようなことは人にもしないということ。自分がいやだな、ということの人にもしちやいけませんよと。

その言葉が極めて重要ということなんです。

これはキリスト教で言いますと「愛」という言葉がありますね。これは、自分が人にしてもらいたいなということをして他の人にもしてあげなさいという言葉と一緒にありますね。それから仏教で言う「慈悲」という言葉がありますね。慈しみとか、憐れむことだとか、情けとか。それと同じ意味の言葉なんです。儒教で言うまさに「恕」。そういうものが、キリスト教で言う「愛」、仏教で言う「慈悲」。そういうことなんです。だから、極めてここは大事だなということを感じます。

(民信無くば立たず)

それでは、次の言葉に移りましょう。

子貢政(まつりごと)を問う。子曰く、「食を足し、兵を足し、民之を信にす。」と。

子貢曰く、「必ず已(や)むことを得ずして去らば、斯(こ)の三者に於いて何をか先にせん。」と。曰く、「兵を去らん。」と。子貢曰く、「必ず已むことを得ずして去らば、斯の二者に於いて何をか先にせん。」と。曰く、「食を去らん。」と。「古より皆死有り。民信無くば立たず。」と。

もう一度いきましょう。

子貢政を問う。子曰く、「食を足し、兵を足し、民之を信にす。」と。子貢曰く、「必ず已むことを得ずして去らば、斯の三者に於いて何をか先にせん。」と。曰く、「兵を去らん。」と。子貢曰く、「必ず已むことを得ずして去らば、斯の二者に於いて何をか先にせん。」と。

曰く、「食を去らん。」と。「古より皆死有り。民信無くんば立たず。」と。

これも実はこの会で前にも一度勉強したことがあるんですが、今の時期、この言葉がとても重要なんじゃないかなということでもう一度勉強してわけですが、有名な「信無くんば立たず」という言葉はここからきているんです。

これは子貢が、政治において大事なところは何ですかということで孔子様に尋ねた。政治で非常に大事なものは、国の食糧事情をきちんとすることです。それから国の守りですね。軍備をきちんと充実させておくことが大事だと。それから、為政者・指導者は、国民から信頼されなければいけません。その三つが極めて重要なんですということを答えたわけです。

そこで子貢は、この三つの中から一つを捨てるとしたら何を捨てたらいいんですかと言ったら、孔子は、三つみんな大事だけれども、それは軍備を捨てるということだと言われたんですね。では、その残った二つのうちから一つを捨てるとしたら何なんですかと言ったら、孔子は、食糧を捨てるということ。食糧がなければ死んでしまうけれども、死は昔から誰にもあるんだ、いつかは人間は死ぬんだと。為政者は国民の信頼感を失ったら国は成り立たないんだということで、信無くんば立たず＝信頼ということがいかに大事かということ孔子は言っているわけでございます。

ですから、今も昔もやっぱり、信頼。指導者が国民に信頼されるということが極めて重要だということであるわけです。

(『論語』に学ぶとは)

それでは、これから「継続することが目的」についてお話します。

おかげさまで、日本論語研究会も5年目を迎えました。そこで今日は、「5年目を迎えた日本論語研究会」について、お話しをします。

今日初めて来られた方もおられますので、どうして日本論語研究会を始めたのかなということなのですが、かつて私は、家内(妻)に言われて(妻は台湾出身)、「台湾の儒学の偉い先生が日本に来ておられるので、一度、勉強に行ってみたら」ということで、『論語』を習うきっかけを得ました。それで『論語』を勉強したのです。

一緒に勉強したのが、今日休んでいますけど、皆さんもよく知っている村木(春彦)さ

んと『論語』の勉強を始めたのです。「村木さん、最近来ないな」と思って皆さん心配していると思うのですが、昨年末、脳梗塞で倒れたんです。それで年末にお見舞いに行きました。また、先週、彼から電話がきまして、横浜の病院でリハビリをやっているということで、早速、お見舞いに行きました。今日も電話いただいたのです。今日の電話は、ぜひ僕の話を知りたいということで、「リハビリの効果もだいぶ上がり、車椅子を使わなくて杖について歩けるようになった。それでぜひ行きたいということでお医者さんに言ったのだけれど、まだダメと、許可が出なかったということで、行けない」という連絡がありました。

その村木さんと一緒に論語を勉強していたのですけども、とても良いことなんですよ、『論語』を勉強するというのは、僕らはずっと、知識というか、いろんなものごとを頭で覚えるというのがありますけれども、精神的な強さとか心の豊かさみたいなものを学ばないで来ました。

それが、『論語』を学ぶと、だんだん心が豊かになり、今までずっと自分のことしか考えなかったのが、やっぱり人のためになることも大事だね、というようなことを思うようになってきました。

それと、『論語』というのは、「言ったことは、学んだことは必ず実行しなさい」という教えなのですね。行動学なのです。だから、いい加減なことを言っちゃいけないよというようなこともあります。

今もそうですけども、社会の状況を見ますと、やっぱりちょっとおかしいなと、みんな思いますよね。オレオレ詐欺だとか、人を騙すとか。例えば政治家もそうですし、企業のトップもそうですし、ちょっとやっぱりおかしいなというところはあるわけですよ。

そのようなこともあるし、また若い人たちもそうですし、我々もそうですけれど、道徳的なことが欠けているのでは、というところが一番心配になって来ているわけです。

こうした今日の現状については、皆さんも分析できますよね。分析はできるけれども、それでは、それを治すにはどうするんだということはあまりないんです。

学校が悪いとか、社会が悪いとか、政治が悪いとか言って、評論家みたいに分析は皆さん本当にできるんですけれど、では、それを治すためにどうするんだという具体的な行動がないんですね。それで、小さくてもいいから行動を起こそうとか、『論語』を勉強していますと、じっとしてられないんです。行動しなくてはならないんですね。

学んだことを実践しないといけない。

(日本論語研究会について)

ということで、日本論語研究会という小さな集まりを、最初は平成17年1月に、赤羽の駅前の市民文化センターで始めたのです。最初、40名の方が集まってきました。そうしたら、そのときに、僕の慶應義塾大学の先生である小林節教授も見えられて、「田村君も慶應大学の非常勤講師・先生をしているんだから、次回から論語研究会は慶應でやりましょう」と言われました。慶應で開催すれば教室もタダということもあります。小林先生も慶應の先生だし「君も先生だから大丈夫だから」ということで、2回目から慶應大学をお借りしてこういうことになったわけです。それで、毎月1回、開催するようになったわけです。

最初の頃は、講師の方といってもそんなにビッグネームの方はおられませんでしたが、僕だとか村木さんだとかが1年のうちに何回か手分けしていろんな話をしました。僕自身も、例えば、ぜんぜん知らなかったけれども、「聖徳太子の十七条憲法」の話をしたり、西郷隆盛の話をしたり、あるいは渋沢栄一の話をしたり、武士道の話などをしたりしました。

テーマを決めて一生懸命勉強すればそれなりなものになります。僕の話聞かれてた方から見れば、少し物足りないところはありますが、一生懸命にそれなりの話をしてきたわけですが、だんだんこうして回を重ねていくうちに、参加者の輪が大きくなってきたわけです。

そしてまた講師の方も、会の参加者の人が紹介をしてくれたりして、だんだんビッグネームの方が、例えば中條高德さんや安岡正泰さんだとか、先日の富士通会長の山本卓眞さんだとか、今回も四條中納言山陰嫡流四條司家第四十一第当代の四條隆彦さんなども来てもらえる。こうしたビッグネームの方をご紹介していただく方がおられて、こうしてやって研究会も盛況になって来たわけです。ですから今日も、この会場、80人ぐらいの方が参加されているわけです。前回も100人近くの方が参加され、大変盛会だったんです。

僕も、自分で勝手に始めた研究会ですから勝手に辞めていいわけですが、参加者がいなくなったらしょうがないから辞めようと思っているんですね。それはなぜかという、講師の方に来てもらうでしょう。全部タダなんです。講師料を払わないんです。交通費も払わないんです。すごい会でしょう？ (笑)。

この前は、日本プロ野球コミッショナーの加藤良三さんのところに会いにあって、「日本論語研究会は、こういう会ですが、加藤さん、いいですか？」と率直に言いました。す

ると「分かった。君が言うんだから」と。それで加藤良三さんは来てくれたんですね。そうして講師の方に来てもらって、参加者であるお客さんが少ないと、それはやっぱり調子が悪いわけですね。だから、僕がこの会を辞めるときは、お客さんがうんと少なくなったときにはと思っています。

そして、こうやって何となく人のために一生懸命やっているのですけれども、僕は、論語研究会46回全部に出席していますから、いちばん勉強になっているんですね。自分でそう思います。そして、またこうして自分で話す機会も皆さんのおかげでいただいているということで、人のためにやるということは、実は一番自分のためになっているんだなということを、最近、非常に確信をするようになりました。

(一に人財、二に人財、三に人財)

次に、去年お話ししたときには、継続することは非常に力になると言いました。

だから、「継続は力なり」。この言葉は、皆さんよくいろんなところで、「続けるということはパワーだ」という話を聞きますね。

去年発売された『日本でいちばん大切にしたい会社』（坂本光司著、あさ出版）という本があります。この本を読んで感じたのは、続けていくことが一つの目的なんだ、大切なんだな、ということを感じました。どうしてそうなったのか、という話を少ししていきたいと思います。

この本、『日本でいちばん大切にしたい会社』は、年末、国会の中にある参議院の「五車堂」さんという有名な本屋さんがあるんです。そこのおやじさんから、「これ、田村さん、ぜひ読んでよ。いい本だから」ということで、薦められて読んだんです。

この本には、「多くの人を満足させることこそ会社の使命」と書かれていました。

どうして、この本が良いのかというと、最近、ニートとかフリーターだとか、派遣切りだとか、いろんな問題がありますよね。結局のところは、報道の大半が、社会がどうにもならなくなって、「社会が悪いんだ、政治が悪いんだと」、みんな責任をそういうふう社会のせいにするんですけどね。

でも、例えばニートとかフリーターとかということで切ない思いをしている人から見ると、それは他人や社会が悪いんだからというふうに言われると、ほっとするんでしょうね。

「君は悪くない、他人が悪いんだよ」——。ほっとするけども、でも何もならないんです

よね。解決には。

そうじゃなくて、つらいかもしれないけども、あなたにも責任があるんですよ、同じ境遇でも頑張ってるうまくいっている人いるでしょう、ということなんです。

結局、なんでそうなったかというのは、自分にも原因があるし、自分は本当に努力したのだろうかということを考えるように仕向けていかないと、世の中っていうのは、うまくいかないだろうなということを感じたんです。

この本の著書は、坂本（光治）さんという法政大学の教授ですけど、彼は、北は北海道から南は九州・沖縄まで、会社を6000社ほど回ったんです。それで、会社がうまくいってないところ、ダメな会社の経営者はどう言うかということ、「問題は内ではなく外にある」と。

こうした経営者が必ず言うせりふというのは、「景気が悪いからとか、政策が悪いから、あるいは規模が小さいとか、ロケーションが悪いとか、業種が悪い」そして、「いい人材に恵まれない」などなど、そういうことを言うわけです。

ところが、この本を書かれた坂本さんは、いや、そんなことは関係ないんじゃないかということを使うんです。日本理化学工業というチョークをつくる会社、社員は50名。小さな会社です。でも、市場の30%をほこってる。更に社員の7割が障害を持った人。50年間ほぼ毎年、採用を続けているんです。障害者雇用を避ける会社が多い中、小さな規模にもかかわらず、優良企業を続けているというところがあるんです。

あるいは中村ブレイスという、義肢——手とか足を失われたときそれを補う義手とか義足、そういうのをつくっている会社なんです。これ、ロケーションは決してよくないんです。日本でも不便なところにあるんです。JRの松江駅だとか、出雲市駅から乗り換えて大田市駅で降りて、タクシーで山の中を20～30分入った、石見銀山のふもと。そんなところにある。それでもお客さんは世界中から殺到しているということなんです。

だから、我が社はダメだからとか、小さいから優秀な社員が来ないというのは経営者の誤解・錯覚なんだ。重要なことは、その会社が私たちの心を打つようなことをやっているかどうかということなんです。

社員を機械としてじゃなくて一人の人間として評価して自己実現を助ける、そういう思いやりや仕組みがある会社に自然と人は集まってくる。

そして経営がうまくいかない理由というのは内側にある。坂本教授は、企業経営に関しての問題の99.9%はつまり会社の内部にあるということなんです。環境や規模や業種ではな

いんだと。例えば五人に対する使命と責任を果たそうという意識が欠落している会社はうまくいくはずがない。企業経営は、人・物・金、人材・技術・情報だといいますが、こうした見方はそもそも違うんだと。

坂本さんは、経営学では、「一に人財、二に人財、三に人財」、あとは人間を幸せにするための道具にすぎないんだと。人・物・金といいますが、物というのは設備や商品という名の道具だと。金だって、人間が経営活動するための道具にすぎない。つまり、不況を克服できる唯一の経営資源は人財しかないんだ、好況を持続させることのできる唯一の経営資源も人財なんだと。

本来は、好況だから人材が欲しい、不況だから人財が欲しいというのが正しい在り方です。ところが実際は、好況になると人を採用し、不況になると人を採用しない会社が圧倒的だ、これはおかしいと。

景気は与えられるものではなくて創るもの、お客様が喉から手が出るほど欲しい商品を創り提案すれば、それはうまくいくんだということなのですね。それで、日本でいちばん大切にしたい会社を増やそうということで、そのためには、やっぱり人を大事にするというのがものすごく大事なんだということを言うわけです。

(続けていくことは大事)

そこで僕がふっと思ったのは、続けていくことは大事だということなんです。

企業経営の第一義というのは、社員とその家族の幸福を追求し実現すること。社員と、その社員が最も大事にしている家族を路頭に迷わせてはいけません。だからこそ会社というのは継続させていかなければならないんです。

会社がつぶれちゃえば従業員も路頭に迷うわけですね。会社というのは続けていかなきゃいけません。続けていく。会社の第一の使命というのは業績を上げることで成長させることでもない。まず業績ありきではなくて、継続させるために業績や成長が必要なんです。

ですから、働いている社員に対する使命と責任を果たし、いかに会社として継続していかれるかというところから出発して、設備投資をしたり、事業展開をしたり、決断しなければいけない。五人に対する使命と責任を果たしているかいないかが会社の成績で決まる。

日本でいちばん大切にしたい会社はすべて、その使命と責任を果たそうと、それはそれは

懸命に経営を行っている会社なんだと。

だから、続けるということなんですね。続けるというのは力というんじゃなくて、会社が続けていくということが大事だし、目的だというふうに思ったんです。

国家もそうなんですね。日本がなくなっちゃったらどうなんですか？

変な話でしょう？ だから、続くということを考えなければいかん。日本が続くということは日本の国家目標なんです。いろんなことあるでしょう。戦争もあるし、経済不況もあるし、大災害もあるでしょう。その中でめげずに、日本という国家が続いていくこと。あるいは、日本が誇れるのはやっぱり皇室ですよ。皇室がずうっと昔から長く続いているからこそ、価値があるんですね。それを大事にして目的にしていこうということです。

長嶋茂雄という大選手・監督がいたでしょう。やっぱりいいことを言ったんですよ。「巨人軍は永遠」だと。言ったでしょう？ 巨人軍は続けることが大事だということでしょう。だから、野球の天才、ひらめきも、そういうところをやっぱり分かっているんだなということをつくづく思うわけでありませう。

(家族旅行で比叡山の延暦寺に行った)

それから、今年、私も年がもう56歳ですから。自衛官の方もおられますけど、56歳になると、たいがいの自衛官みんな定年なんですよ。一佐という役割の人はみんな定年なんです。その上の例えば将補とか将とかっていう人はもうちょっと定年が上ですけどね。

今日も実は福岡（久留米市）の番匠（幸一郎、陸上自衛隊幹部候補生学校長）さんから電話がありました。

後でお話ししますが、僕が海賊対策の問題で英国、アフリカ、アラブとかへ海外出張へ行ってきたものですから、その後、忙しかっただろうからということで、それで今日、電話がきたんですよ。彼なんかは、いま将補ですから、56歳過ぎても大丈夫ですけど、56歳になったら定年なんです。そういう意味では、僕も定年なんですよ。

そんなことで、できるだけ正月ぐらいはカミさんと一緒に旅行に行こうということで、バック旅行ですね。バック旅行というのはけっこう安いものですから。それで去年はスペインに行き、その前年は東欧というか中欧ですね。オーストラリアとかハンガリーだとかチェコ、スロバキアとかに行ったんです。

今年は、イタリアとかトルコとか行こうと思ったんですが、政局が大混乱していたもの

ですから、国内バス旅行にしました（笑）。バス旅行にしまして、12月31日は琵琶湖の畔の彦根ですね。ひこちゃん（ひこにゃん）とか何か言われている彦根市。関ヶ原にも行きました。

それで、元旦が比叡山・延暦寺。で、京都の銀閣寺、平安神宮、八坂神社。

2日は大阪の住吉神社ですか。それから奈良の春日大社・大仏さん見て、それから奈良公園。3日は伊勢神宮の内宮、外宮、それから奥の院まで行って、それで帰ってきたんです。そのときに、正月元旦の初詣は、小雪が舞っていましたが比叡山の延暦寺に行っただけです。比叡山の延暦寺は、788年に伝教大師最澄が比叡山に開いたということなんです。今年は「継続することは大事だな」というものを自分で思っていましたから、そうしたら、そういうことと遭遇するんですよ。面白いものですね。

延暦寺の根本中堂でお坊さんのお説教を聞いたんです。そこには不滅の法灯というのがあって、それは、火をずっと灯して、なんと1200年。毎日、火を灯す。僕らすごいと思うでしょう？ 1200年。ところが、お坊さんは平気と、「いや、たった1200年しかやってないんだ」というんです。それは何かと云ったら、「弥勒菩薩が56億7000万年後に現れるまで続けるんだ」というんです。すごいでしょう？（笑）。

その弥勒さんというのはどういうのか。お釈迦さんがいますよね。お釈迦さんの次に仏様になっていいと約束された菩薩さんなんです。お釈迦さんが亡くなります——入滅後、56億7000万年後に弥勒さんがこの世に現れる、来られると。で、お釈迦さんの救いに漏れた衆生——我々もそうかもしれないですけど、そういうものをことごとく済度する、助けてくれる、迷いから解放してくれるという、ありがたい未来仏なんだということなんです。

その弥勒さんが来るのを待って、毎日毎日、火を灯してる。1200年なんていうのは始まったばかりだと。そういうことを言うんですね。火を消さないように、朝夕、絶つことなく油を毎日注いでる。だから、火を消さない努力が大事なんだと。毎日のお掃除もそうだよと。

そしてここでは、「一隅を照らす」ということを継続することで、良い人生が、充実した人生が送れるということを言ってるんです。何事も続けるということは大事なんだということなんです。だから、ぼくがさっき言ったように、続けるということが大事だというのはここでもあります。

(8回、ユニクロの柳井(正)社長と日本水泳連盟理事・シンクロ委員長の金子正子先生)

そしたら、また最近こういうのがあった。昨日の新聞とか今日のテレビの報道で、アメリカの経済誌の「フォーブス」というのが19日に発表したんですけど、日本の富豪40人、トップはどなただと思います？

ユニクロの柳井(正)社長なんですね。ユニクロがいちばん金持ちなんです。2番目がパチンコのサンヨーの毒島(邦雄)名誉会長。3番目が任天堂の山内(溥)相談役なんです。

なんでそんな話をしたかというのと、なんでユニクロだけが売れてんのかということなんです。ユニクロの社長の柳井さんが1月3日の朝日新聞のインタビューでこんなことを言ってるんです。ユニクロはリスクをとれるのかとの質問に、柳井さんはどんなことを言ったか。「同じことをやり続けてるからだ」と。「スポーツと一緒に、何回も繰り返せば上達するんだ、プロフィット——いわゆる利益とリスクはイコールだ、日本人の最大の欠点は、安心、安全、安定志向、当然、利益は生まれない」というふうに答えた。同じことをやり続けていること、これこそが大事なことなんだということを言ってるんです。面白いこと言いますよね。おんなじことをやる。

スポーツの選手もそうですよね。やっぱりおんなじことを一生懸命、一生懸命、練習するから、すごいことが起こるわけです。最近、日本水泳連盟理事・シンクロ委員長の金子正子先生と昨年の北京オリンピックでデュエット3位(銅メダル)に輝いた鈴木絵美子・原田早穂さんの話を聞く機会がありました。シンクロで入賞するためには、やっぱりすごい訓練ですよ。同じことを繰り返す。人よりも余分に繰り返すということ。そういうことが極めて大事なんだということなんです。

(一隅を照らす)

次に、比叡山へ行って、根本中堂というところで、文字が書いてあって、それを一生懸命、書き写した。それは、ここに書いてありますけど、

一隅を照らす

此れ則ち国宝なり

国宝とは何物ぞ 宝とは道心なり

道心ある人を名づけて国宝となす

と。

意味も書いてありましたから、ずうっと手で書き写したんです。意味はこういうことです。

真の価値とは、物質的価値あのあるものを言うのではない。(物質的価値あるものではない) 国家社会の平和・人類の幸福になることを能(よ)く行い、能く言う道心ある人を宝と言う。

社会の一隅に在って世のために、国のためになる好い事や、利益になる事を利己的な心を忘れて尽くすことこそ慈悲の極みであり、この人こそ国の宝である。

この人造りを千二百年前、伝教大師はこの山に於いて、国家を利益し、群生(他の人々)を度け(たすけ)、との大理想を以て、諸国の師となるべき菩薩像を養成し、民心の教導・文化の開発に尽くされたのである。

一ということなんですね。

だから、一隅を照らすと。現代社会に生活する我々というのは、こういう伝教大師の精神をどのように生かしていけばよいかということだと思うんです。お金とか物ではなくて、その一隅を照らす道心ある人こそ国の宝なんだということなんですね。お金とか名誉というのは死んだら持っていけないんです。

(映画「おくりびと」)

昨日、日本アカデミー賞というのが発表されたんですね。それで大賞を取ったのは、本木雅弘さん主演の「おくりびと」。作品賞、監督賞、主演男優賞、10部門取ったんですね。ぼくは最近、うちのカミさんとよく映画を観るようにしてるんですけど、ほとんど洋画なんですね。でも、「おくりびと」観たんですよ。なんで観たかといったら、飛行機の中で…ロンドンに行きましたから、海賊対策の視察調査で。これは後でお話しますが、その飛行機の中で「おくりびと」を観たんです。その「おくりびと」、観た方もおられると思いますけども、納棺師。納棺師というのは、遺体を棺桶に納める、その人の話なんですよ。

それで、ぼくはその映画の中で印象的だったのは、その納棺師である本木さんの知り合いの風呂屋のおばさんが亡くなって、火葬場で燃やすときに、おばさんの友だちの火葬場

の人が「死とは門なんだ、終わりではないんだ、また別のところへ行くんだ」、というセリフがあるんですね。確かに、死んじゃうと肉体というのはなくなりますけど、魂といいますか、何か……なかなかうまく説明できないんです。何か残ると思うんですね、心的な。よく言いますね、あの世があるとか。悪いことをすりゃ地獄に行くんだと。

そういうのはやっぱりあるんだと思うんですよね。また、あるんだということを、最近、教えなさすぎるんです。それは、日本において宗教的なものをあまりにも教えないところが大きな問題だと思うんです。そういう宗教的なものを教えるというようなことは、悪いことをすれば、あの世があつて、地獄に行つて、大変なことになるんだということを小さいうちから教え込むということは、極めて重要だと思うんです。

そうすると、怖くて悪いことできないでしょう。死んでからの世界もあるんだと思うと、おれおれ詐欺だとか、人から何か盗んじやうとか、人を殺すなんてことは、とてもできなくなるんだと思うんですね。ある意味じゃ、ここで我々が勉強してるのもそういう宗教教育というか、そんなことの一部を担ってるのかなと思ってるんですけど、そういうことってとても重要なんじゃないかなと思うんですね。

そういう雰囲気というのはやっぱり、日本の国民の中に気持ちがあるんですよ。あるから、今回、「おくりびと」というのがあれだけヒットして、日本アカデミー賞をもらった。これから、アメリカのアカデミー賞の外国語映画賞の部門でノミネートされてますから、ひょっとしたらアカデミー賞を取るかもしれないですね。結局、世界中が病んでるんですね。心の問題で。だから、そこは宗教の欠落みたいところがやっぱりあるんで。

だから、何が大事かといったら、死んでもあの世があつて、悪いことをやったら大変なことになるといって、それが怖いから、できるだけいいことをやろうねというのが一つあるんですね。

それから、自分がよりよく生きるためには、最初にぼくが言ったように、己の欲せざる所を人に施すこと勿かれ。キリスト教でいえば愛、あるいは仏教でいえば慈悲が大事だねというのは、個人的な、エゴイズム的なことではなくて、できるだけ人のために尽くすということが実は人間社会にとって大事だねということが広まっていくことは、世の中をよくすることだなというふうに思っています。

(11回、「わが心清め きよめて よく見れば まことは神も 我が心なり」)

それから、次にレジュメにありますけども、「わが心清め きよめて よく見れば まことは神も 我が心なり」という言葉が書いてありますね。

これはどこからきているかという、実は平安神宮でぼくがおみくじを引いて、中吉だったんです。その中吉の言葉がこれなんです。いい言葉ですよ。

この意味というのは、此（こ）の歌の意（こころ）は、「自分の心の先入観や偏見を取り除いて、率直に見てみると、本当は誠という神様の心と同じだ」ということで、人が生まれながらに持っている誠という霊性は、歳を経るに従って、浮世の穢（けが）れが被（お）ってしまい忘れさられているが、素直に反省をして、他人の心を想いやる事が出来れば、其（そ）の心の誠は神様に通じ、清清（すがすが）しい至福（しふく）の気持ちになれるものである。」ということなんです。

だから、これもいい言葉だなと思うんです。「わが心清め きよめて よく見れば まことは神も 我が心なり」——自分の心なんだということなんです。

ぼくは孫2人いますけども、孫も最近あれですよ。6歳と2歳になってきたんですけど、もうちょっと小さいときは素直だったんですが（笑）、もう大変です。それぐらい意識が出てきて、けっこう頑固になったり、何か変な悪知恵がついてきますけど、もうちょっと小さいときは、本当に純情可憐で、善人そのものなんです。みんなそういう気持ちあったんですよ、ぼくら。それがだんだんおかしくなっちゃって（笑）。だから、それをもう一回戻そうという、そういう気持ちが常に大事なんだなと思ってます。

（「人生で大切なもの2つ」）

それから、小野晋也さんという国会議員がいるんですけど、ぼくと非常に仲がいいんです。それが、政治家辞めるんですって、次は。なんで辞めるかという、「政治やるよりも、日本で失われた精神的なものとかそういうものをきちっと普及させなきゃ日本はよくなりから、おれは政治家辞めてそういうことやるんだ」といっている先生がいるんですけど、なんかウマが合うんですね。やっぱりそういうところは、何か似てるんでしょうね。

その先生の勉強会があって、西郷隆盛の話だとか吉田松陰の話だとかいろいろやるんですけど、その中でこんなことがあるんです。

「人生で大切なもの2つ」というところへいきますけど、小野先生は松下政経塾の一期生なんです。ですから、松下幸之助のほか、松下政経塾の副塾長の丹羽正治さん（当時、

松下電工の会長) がいたんですが、その丹羽さんがこんなことを言ったと。

「人生で大事なものは2つ。これだけ覚えておきなさい。それは、一つは『気がつくことはいいことだ』、そして『続けることはいいことだ』という言葉だ。これだけだ」と語りかけていただいたことを思い出したということ、小野先生は述べられた。

「気がつくことはいいことだ」とは、あんまり鈍感であってはいけないということでしょうね。「続けることはいいことだ」というのは、まさに今回のテーマである「継続することというのは大事だね」ということ。おんなじことを言うんです。

だから、自分で、継続することはいいことだな、目的だな、なんて思っていると、そういう場面とかそういうのに出くわすんですね。そう思ってますと、ああ、あったな、これがこうだなと。でも、そういうことを頭に思っていないと、バーッといろんなものが流れてても気がつかないんだと思うんです。

自分で今年は継続することは大事なんだと思っていると、そういう事象にどんどんあう。不思議なことが起こるもんだな、なんてことを最近考えているわけです。だから、続けるということは非常に大事。

(二宮尊徳の「積小為大」)

だからここで、「積小為大」と。

二宮尊徳さんのモットーとしての言葉ですね。

小さいことを積み重ねていけば大きなことになるということ。ぼくも若いときからこの気持が大好きでした。

東京オリンピックって昔あったでしょう？ ぼくが小学生のころ。体操競技で、ウルトラCというのがありました。すごいです。今はもっとすごいですよね。ぼくは人生にウルトラCというのはないと思っています。

だって、できませんから。いきなり五段飛びなんてやって、引っ繰り返って、体こわしちゃうでしょう。ウルトラCは人生にないなと。

何があるか。一步一步、積み重ねていく。そうすると一つのものになるでしょう？

一步一步積み重ねると、あ、けっこう歩いたねとか、なっちゃうでしょう？ 勉強でもそう。コツコツ、コツコツ。あ、やったね、となっちゃう。そう思って、ぼく、人生やってきたでしょう。だから例えば、ぼくの別の資料に入ってますけど、本も25冊ぐらいに

なったんですね。コツコツ、コツコツと……。

でも、うちのカミさん（邱淑恵著の単著が僕より多いため）に言わせると、あんた共著が多すぎるからダメなんだと言われるんですけど。そういう意味では、この言葉というのはとても大事なんです。コツコツ、コツコツ。これも、継続するというのはすごいなと。というようなことをつくづく思いました。

（ソマリア沖・アデン湾の海賊対策）

あと後半は、ぼくの専門の話をぜひしてくれという声もありましたので、最近の海賊対策。ぜんぜん話が飛びますけど、海賊対策という話について少しお話ししたいんです。

海賊対策では、最近のソマリアとかアデン湾のところであんなと海賊が多くなった。

地図を置きましたけど、アフリカですよ。エチオピアとかソマリア。で、サウジアラビアと書いてあるでしょう？ で、左の上のほうにスエズってあるでしょう？ ここ、スエズ運河があるんです。そこからずっと地中海ですね。地中海を通過して、紅海を通過して、アデン湾。それでインド洋に出てきて、それで日本に行くわけです。そのソマリアの周辺、アデン湾に、最近、海賊が出没して、これが世界的な大問題になっているということに対して、何かやらなきゃいけないということなんです。

それで、今年になってから、自民党と公明党——与党の海賊対策に関するプロジェクトチームということで検討を始めたんです。そして、1月22日に中間のとりまとめというのをつくったんですけど、海賊対策については、国連海洋法条約なんかがあって、海賊を取り締まらなきゃいけないというようなことで、要は、日本に海賊を取り締まるための法律ってありませんから、新しい法律をつくりましょうということになったんです。

ただ、時間がかかります。新しい法律は3月の中旬に法律として出てくることになってますけど、それから国会審議をやったりして、ひょっとしたら、野党が大反対したらなかなか法案が通るか通らないか分かりません。

そうかといって、何もしないわけにいかないということで、当面、今ある法律——自衛隊法の第82条に海上警備行動が発令できるというのがあるので、それで海賊対策に行こうということで、これから海上自衛隊が出ていくわけですね。

昨日も呉で、海上保安庁と海賊対策についての具体的な訓練をやったりしたんです。普通は海賊対策というのは海上保安庁の仕事なんです。ですから、日本の近海の海賊取り締

まりなんていうのは海上保安庁がやっています。

それから、海賊が近年多かったのはマラッカ海峡です。インドネシアだとかマレーシアとかあのへんが非常に海賊が多くて、あのへんなんかは海上保安庁が協力したりしてやってきたんですよ。

ただ、今度はうんと遠いところになっちゃうでしょう。そうすると、海上保安庁は船がないんですね、そこまで行く。また、日本の近海の警備をやることになっていますから、そんな遠くまで行く船にしませんし。

それから、ソマリア沖の海賊というのは、ソマリアという国がもうグチャグチャですから、ソマリアの海軍の人が海賊をやっていることなんかもありますから、武器が例えば、ロケットランチャーだとか、ちょっと大きな銃火器を持っていたりして、海上保安庁では対処できないというようなことがあって、それで自衛隊ということになった。

それと、自衛隊ということと同時に、大体あの近辺で海賊対策をやっている船というのはぜんぶ軍艦なんです。そういう意味で、日本の自衛隊が出ていくというのは正当性があるということなんです。

(海賊対策のQ&A)

そこで、海賊対策といってもなかなか分かりにくいものですから、ぼくのほうでQ&Aというのをつくったんです。

で、「ソマリア周辺海域における海域の状況についてお聞かせ下さい」ということで、非常に海域が増えて大変なんですよというのがクエッションの1ですね。

それからクエッションの2というのは、その実態、手口、そういうのはどうなんですかっていうことなんですけども、非常に高速の小型の船で、GPSなんかも備えているんだということで、低い舷——ふなべりの船がねらわれたり、遅い船がねらわれたり、ロケットランチャーとか自動小銃、そういうものを持っているところがやっていると。

で、ソマリアの海域というのは、ソマリア本土に基地がある。それから、海賊は身代金目的なんです。身代金目的ですから、相手にあんまり危害を与えるようなことはしないんだということなんです。

(Q3) ソマリア周辺海域、特にアデン湾海域における、日本の海上交通の重要性はどうかということなんです、ヨーロッパからの貨物(船)がスエズ運河を通過して日本

に来るんです。ですから、年間、約2千隻、日本の関係の船舶がそこを通るんです。約2千隻というのは、全体の船の数の1割ぐらいなんです。だから、日本だけで1割もあるということなんですね。

今、海上警備行動で日本の自衛隊が出ますけども、これは法律の規定からいうと、日本の関係の船しか守ることができないということになりますね。だから、完全に外国の船だと守れないということです。日本の船籍の船、あるいは日本の船籍でなくても日本人が乗っている、あるいは日本の荷物があるというところは守れるんだけど、外国の船は守れない。

だから一部には、外国の船を守れないんだから意味ないんじゃないのという議論がありますけど、ただ、あの地域では、1割も日本の船があるんだから、「自分のことぐらい守ってよ」という声が大きいわけです。だから、今回、海上自衛隊が出ますけど、それだけでも意義があります。新しい法律ができれば、外国の船も守れるということです。

(灰色の船が近づいてくると海賊は逃げる)

それから、国際的な取り組みというのは非常に盛んに行われてる。一生懸命やると。国連の安保理の決議があったり、あるいはいろんな国——例えば中国も、それから韓国も派遣をすることになってます。そういうことをやって、世界中がソマリアの海域の問題に一生懸命やってるということになります。

そして、その次のQ5ですが、日本はどういう船を守れるんですかと。日本の船籍、外国船に乗ってる日本人、その他の船ですけど、その荷物なんだと。

それから、(Q6)よくマスコミで議論になります海上警備行動に基づく自衛隊の武器使用の権限がどうなるのか。撃たれないとなかなか撃ち返すことはできないし、武器の制約というのは日本の憲法の関係です。そこを、海賊の場合は少し緩和してもらわないと困るねというような議論があります。

今回、イギリスなんかへ行って調査したときに、EUの海上部隊の参謀長なんかこんなこと言っていましたね。

海賊の脅威については、海賊からの脅威の評価って非常に低いんだと。なんで低いかというと、まず海賊は、船員だとか船舶に危害を加える可能性は少ない。身代金が下がっちゃうから、そんなことはやらない。また仮に軍艦と戦闘行為に臨んだ場合、圧倒的に負け

ちやう。小さい船ですから負けちゃいます。だから、海賊は軍艦と戦闘はしないんだというんですね。灰色の船が近づいてくると海賊は逃げちゃうんです。という話なんですね。

プロのお相撲さんにチビッ子がかかっているような話で、それは大変ですよ、軍艦ですから、日本の護衛艦は。簡単に、そんな小さい船、撃沈できますからね。

海賊というのは、泥棒なんです。テロリストじゃないんです。

自分の命がいちばん惜しいんです。ただ、海賊というのはものすごく割に合うわけです。弱いやつを捕まえて、それで身代金をもらうというやつだから。

泥棒と一緒にですよ。門構えがきつくてガードマンがいるところには泥棒は入らないんです。空き巣なんですよ。金がありそうで守りが弱い、そういうところをねらう。というところなんですね。

それが海賊の問題。

(与党ソマリア沖海賊対策等に関する調査団)

そんなようなことで、実は現地調査に行こうという話になったんですよ。

メンバーは中谷元さん。これは防衛庁長官やって、このチームの責任者です。佐藤茂樹さん。公明党で、このチームの責任者です。

この2人を中心に行こうという話で、最初、中谷さんから、「田村さん、2月16日から21日で行きますから、ついてきてください」というんです。ぼくは断ったんですよ。なんで断ったかといったら、「日本論語研究会で講演することになったているから」と言っておね(笑)。いや、ほんと。日程決めてましたから、「悪いけれども、これはおれ大事な会だから」って断った。それで、別の人を算段して。

3日後に中谷さんが、「田村さん、日程変えたから。早く行けということもあって日程変えたから。2月8日から13日まで行くということになった。これなら田村さん行けるでしょう」と言われるから、しょうがないから、「じゃ行きます」と。それで行ったんです。

そしたら大変ですよ。3泊6日ですよ、日程が。すさまじいんですよ、これ。日程ちよつと出てるいでしょう。

2月8日・日曜日に成田から発ってロンドンに着くわけでしょう。同じ日に発って同じ日に……。ま、その日は寝ますよね。

9日は、ロンドンをずうっと回って、それからロンドンを出発したのが21時ですよ。

それでどこへ行ったかという、エチオピアですよ。夜行のエチオピアの飛行機で、10日の7時半にアジスアベバに着くんです。で、ジブチへ行くには16時ぐらいまで待たなきゃいけないんですね。その間にエチオピアの首相と会ったりして。で、ジブチに17時半に着いて。その日ですよ、ホテルにゆっくり寝れたのは。

そして、2月11日はジブチでいろいろ仕事をやって、ジブチを18時20分に発って、アジスアベバ。結局、ハブ空港なんですよ、エチオピアは。だから、ジブチに行って、またエチオピアに戻って、それからバーレーンです、中東の。エチオピアを出たのが22時ですよ。

バーレーンに着いたのは翌朝の1時45分。それから何やかやして、部屋に入ったらぼくの荷物だけなかったりしてね(笑)。それで、7時に起きようと言って、起こされて。それでダーッと仕事をその日やりまして、バーレーンを出発したのが17時50分。

ドバイに20時に着いて、ドバイでまたひと仕事して、なんとドバイを発ったのは夜中の3時40分ですよ。それで関空経由で帰ってきたんです。

おかげさまで、下痢しまして(笑)。ジブチで、レストランですね。それぞれのところで日本人の関係者(商社、海外青年協力隊、NGOなど)と一緒に話しをする機会があって、エチオピアもそうでしたけど、ジブチでも話したんですね。ジブチでとても立派なホテルがありました。日本の大成建設がつくりましてね。大成建設の方も海外青年協力隊の人なんかと一緒に話したんですけど、大成建設の人でさえ、「歯磨きは、ミネラルウォーターで」やってるんですよ。だからぼくもミネラルウォーターでやった。うっかり、お昼の食事のときだけ、水か氷かでしょうね。バーレーンに着いておなかを下しちゃって。

で、日本に帰ってきて医者へ行きまして、治ったのは昨日ぐらいですよ。血液検査もしましたが、結局、水なんですよ。水でやられた。

だから、今、水の問題が大きくテーマになってますけど、水って大変ですよ。アフリカは、水がないんですよ、なかなか。水の量もないし、いい水もないんです。だから、日本に生まれてるといのは、それだけでもとっても素晴らしいことなんだということを考えてみる必要があるんです。

(塩野七生さんの『ローマ亡き後の地中海世界』)

それで、ロンドンに行くときに塩野七生さんの『ローマ亡き後の地中海世界』——今日

もテレビで朝やってましたけど——読みましたけど、それは、ローマ帝国が減んだ後はイスラムの海賊対キリスト教世界、地中海が中心でした。

だから、この塩野さんの二つ（上下）の大きい本、海賊の話ばかりなんです。当時の海賊というのは、国家とかそういうのがバックアップして海賊をやっていた。だから、2種類ある。泥棒的な海賊と、国家をバックにした海賊。

それは日本人よく分からないでしょうという説明は、塩野さんの本にある。それをぼくはブログに昨日入れたんですよ。

そういう海賊の時代もあって。だから、ヨーロッパから見れば暗黒の中世ですよ。イスラムの海賊にやられるわけです。浴場ってありますね、ローマに。風呂入って楽しむところですけど、当時（中世）の浴場というのはどういうところかということ、海賊がみんな人質を入れておく牢屋みたいなところ。それが浴場。だから、大変です。みんな人身売買したり。殺し方もひどいんですよ。皮をむいて殺したり。または、すさまじいんです。そういう意味じゃ、ヨーロッパから見りゃ中世は暗黒の時代ですよ。

だって、イスラムのほうは、文明もあつたし、強いわけですから。だから、イスラムの海賊の人たちは、弱腰のキリスト教徒と言っていた。その後、またトルコもそうでした。

そんなのがあって、それじゃダメだということで、キリスト教世界が協力して十字軍というようなことになった、というようなことなんですよ。

それでヨーロッパの守りがきちんとなりましたから、地中海の海賊もあんまりいなくなりました。マラッカ海峡の海賊も最近少なくなったのは、やっぱりその周辺国がきちんと海賊の取り締まりを国家としてやるようになったからこそ減ったんですね。

（諸外国は日本の海賊対策を歓迎）

ところが、ソマリア沖では海賊がなんで多いかというと、ソマリアの国というのは今グジャグチャなんです。国家の体を成してない。そこへみんな海賊がはびこる。

ぼくが行ったときは、ソマリアの暫定政権、大統領というのができてね。ソマリアの大統領というのはどこで選ばれるか。ソマリアでは選べないんです。危ないから。

隣のジブチというところで。60万の人口の。ジブチというところで選ばれる。

で、ぼくが泊まったホテルなんですけど、同じフロアで1人、ガードマンみたいなおっかない顔した人が部屋の前にずうっと立ってるんです。何だろうなと思ってね。ヤクザか

何かいるのかなど。ところが、その次の日にジブチの大統領と会ったら、いや、あのホテルに急ぎよ、ソマリアの暫定政権の大統領が来て泊まってる、次の日にジブチで会議をやって首相を決めて組閣するんだと。そういう話なんですね。

だから、ぼくの近所に大統領が寝てたんですね（笑）。びっくりしました。そういうのがありましたけどね。

そして、なるほどなと思ったのは、この日程見て分かるように、すごい人とみんな会ってるでしょう？ ぼくらの、国会議員のレベルで。エチオピアでは首相でしょう。すごいでしょう？ ジブチでは大統領、外務大臣、議長でしょう。それからバーレーンでは、皇太子、外務大臣、それから国防部の総司令官でしょう。

これってどういうことかといったら、日本がものすごく評価されてるということなんです。日本は素晴らしい国だということの証明なんですね。

（魚の釣り方を教える）

かつて加藤良三（在ワシントン駐米大使、現在日本プロ野球コミショナー）さんがODAの問題でいろいろ話されましたけれども、日本のODA（経済協力）というのはヨーロッパとか中国流の経済援助と違うんだ、「釣った魚をあげるんじゃなくて、魚の釣り方を教えるんだ」と。

要するに日本の援助というのは、ただ為政者のために王宮——パレスをつくってプレゼントするといったものじゃなくて、現地で指導して腕に職を身につけた中産階級を育てて、社会の安定の基盤をつくるようなことを日本はやっているんだということを言っていますね。

それで加藤さんは、いずれにしても、日本は世界から見れば、今、世界のGDP第2位でしょう。大変な成功物語なんだと。で、加藤さんは外務省に43年いて、その間、日本の外務省に戦略があるかと、ほめられたことはないんだと。逆に、戦略がないと、政治家もマスメディアもこぞって批判した。しかし、戦略と呼ぼうと呼ぶまいと、日本より戦後うまくやってきた国を挙げてくださいといっても、ないでしょうと。日本ほどうまくやった国はないんです。文言で戦略とは何かと能書きたれたってしょうがないんです。実績として日本はすごい国になった。

ぼくら、エジプトとかジブチだとかバーレーンへ行きますと、そのことはひしひしと分

かるんですね。だからエチオピアの首相は、「エチオピアの開発のやり方を、ヨーロッパをあんまり参考にするというんじゃなくて、これからはアジアというか日本をモデルにして開発をやっていきたいんだ」と。ちょうどマレーシアのマハティールさんのルックイーストに似たようなことを言っていました。

ジブチの外務大臣は、「ジブチにとって日本は第1のパートナー」と。だから、ジブチに海上自衛隊の基地だとか、P3Cを飛ばす場合にジブチで飛行場を借りるとか、そういう感じに大体なるんだろうと思うんですね。

そうするとジブチのほうでは、「日本のために可能な限りすべての施設、便宜を提供します」といっているんです。それだけやっぱり、日本の今までやってきたことというのはとても素晴らしいことだということを確認できたと思うんです。

(アリババとは)

それから、こんな面白い例がありましたよ。

ジブチで青年海外協力隊の女の人があります。女性はすごいですね。頑張っていますから。そこで、「ジブチの町というのは何か危険がありますか」「いや、そんな危険ない。東京と比べても、そんな怖いこともないし、危険なこともない。ただ、こんなことはありましたよ」というんですね。

朝、散歩していたら、子供たちがワッと寄ってきて、髪の毛引っ張ったりするんだそうです。で、「アリババ」と言った。「アリババ」というのは泥棒だとか盗賊ですよ。

それ、ひと間違いなんです。なぜかという、中国人がジブチに来て仕事やるでしょう。働いた人に、お金払わないで帰っちゃったんですね。だから、中国人に対する評判、悪いんですよ。日本人の女性、中国人と間違えられたんですね。

それで、「アリババ、アリババ」と。そんなことを言っていましたね。

だから、例えば中国はどんどんアフリカに出てっていいことやっているみたいだけど、最近ややいろんなところから反発が出てきました。それは、中国というのはまさに国益——自分のプラスになるために、例えばプロジェクトやったときも従業員もぜんぶ連れてって「バッ！」とやるとか、中国人がお店開いて、それで地元のお店がダメになっちゃうとかというようなことがありますよね。日本というのは結構そこは、その国のために一生懸命やろうと。その国がよくなる方がいいことだというようなことを積み重ねていますし

ね。

それから、今、ODAでも、小さい仕事ですね。プロジェクトの規模が。

人間の安全保障みたいなこと。例えばこの学校を建てるだとか。そういう小さい、教育のためとか、社会福祉の、小さい額の援助をやっていますが、それがいってるわけです。だから、アフリカの大統領なんかには、直接お金はいかないけれども、そういう小さい規模のプロジェクト……。

(アフリカはなぜ豊かにならないのか)

だから、エチオピアの首相は、こんなことを言っていましたよ。

結局、海賊問題を解決するためには、ソマリアという国が国家としてきちんと機能し安定しないと、最終的に解決にならないわけです。そのためには、治安の維持だとかいろいろなことがある。そういう意味じゃ、警察の人とかそういう人たちを増やしてやらなきゃダメですけど、例えばそのためにお金をソマリアにあげるでしょう。ダメなんです。その金、下に下りないんです。

そういう意味で、エチオピアの首相なんかは、金を配る人を雇わなきゃいかん。

ちゃんと下に、警察官にお金が配付されるように。というようなことを言っていましたね。

そこが問題なんです。今、アフリカがなんで貧乏なのかといたら、指導者がそれなんです、みんな。あるいは、自分の周りがうまくいくようにということで、国民は飢えたとか貧乏でもかまわないんです。権力を取るというのは自分が私腹を肥やすという人があまりにも多いんです。だから、アフリカはいつまでたってもうまく開発ができないということなんです。

日本のお隣でもありますね、その例が。

北朝鮮ですよ。北朝鮮だってそうでしょう。国民が餓死したってかまわないんだ。

自分だけは贅沢をし、国はミサイルつくったり核兵器つくったり。ということです。そこが問題なんです。

だから、国民の幸せを考える人がリーダーにならないと具合が悪いわけです。

アフリカの場合はそうでない人があまりにも多いんです。

『アフリカ 苦悩する大陸』（ロバート・ゲスト著、東洋経済新報社）という本があり

ますけど、外国のジャーナリストが書いたんですけど、日本にずっと住んでいて、「どうして日本は経済が発展できたか、日本にいても分からない」というんです。それでアフリカに行った。それで分かったと。

どうしてアフリカは発展しないか。それはリーダーが悪いからだということが分かった。リーダーがよければ富が下の方に向くわけですよ。そういう話ですね。そこはすごく大事だということです。

(米国、オバマ大統領演説)

オバマさんの大統領演説というのがある。

これは、オバマさんというのはメチャクチャ勉強した方だそうです。シカゴ大学で本もたくさん読んだそうです。で、弁護士になってもシカゴ大学で憲法をずうっと長く教えていたというようなことですね。10年間ぐらい憲法を教えていた。ロースクールで、公民権だとか平等だとか、人種問題に非常に強くて。

だから、オバマさんの演説の中には、そういう意味で、いろんな要素がうまく混ざっているんですよ。聖書の話、あるいは独立宣言からの引用、あるいは歴史の話、そういうものがきっちり入っている。そして分かりやすい言葉でやる。

ここで面白いのは、最初のところ、「データと統計に基づく危機の指標、それは測定しにくいもの。しかし、同じように深刻なものは、私たちの国に広がる自信だ。アメリカの凋落は避けがたく、次の世代の人々はうなだれて過ごさなければならないというぬぐいがたい恐怖がある」ということ。だから、データに示せない問題、心の問題が極めて重要だということを行っているんです。

「私たちが持ち続けた精神を再確認し、良い歴史を選び、貴重な才能、世代から世代へと引き継がれてきた尊い考えを押し進めるときが来ました」
—そういうことをずうっと言っているんです。

そういう意味で、心の問題、人の問題、そういうものをものすごく大事にしている。

自信をいかに回復させるか。

失業率を何%にしますとか、何とかという話じゃないんです。

もっと大事な問題があるんです。そこをオバマさんは言ってる。

元気を出そうと。

で、オバマさんの演説を聞くと、やっぱり奮い立つんですね。

自信が出る。そういう工夫がオバマさんの中にあるんだということを知ってもらいたい。

(日本でいちばん大切にしたい会社)

それじゃ、最後、これ読んでみましょう。また何か出るかもしれないですね。

『日本でいちばん大切にしたい会社』について、この個所を読んで泣けました。

障害者の方々がほめられ、役立ち、必要とされる場をつくりたい

日本理化学工業株式会社

五〇年前に知的障害を持つ二人の少女を、「私たちみんなでカバーしますから」という社員たちのたつての願いで採用した日本理化学工業。今、この会社の障害者雇用率は、社員の七割に及んでいます。

会社は、売上げをあげるために、利益を上げるために存在してはいません。

本当に人々に必要され、社員たちも誇りをもって働くことができる、その結果、みんなが幸福を感じることができる、そんな会社になるために存在しているのです。

社員の七割が障害者の会社

従業員約五〇名のうち、およそ七割が知的障害を持った方々で占められている神奈川県川崎市のその会社は、多摩川が近くに流れる、静かな環境のなかにあります。

この会社こそ、日本でいちばん大切にしたい会社の一つです。昭和十二年（一九三七）に設立された「日本理化学工業」は、主にダストレスチョーク（粉の飛ばないチョーク）を製造しており、五〇年ほど前から障害者の雇用を行っています。

そもそもの始まりは、近くにある養護学校の先生の訪問でした。昭和三十四年（一九五九）のある日、一人の女性が、当時東京都大田区にあった日本理化学工業を訪ねてきたそうです。

「私は養護学校の教諭をやっている者です。むずかしいことはわかっておりますが、今度卒業予定の子どもを、ぜひあなたの会社で採用していただけないでしょうか。大きな会

社で障害者雇用の枠を設けているところもあると聞いていますが、ぜひこちらにお願いしたいのです」

障害をもつ二人の少女を、採用してほしいとの依頼でした。

社長である大山康弘さん（当時は専務）は悩みに悩んだといいます。

その子たちを雇うのであれば、その一生を幸せにしてあげないといけない。しかし果たして今のこの会社に、それだけのことができるかどうか…。そう考えると自信がなかったのです。

結局、「お気持ちはわかりますが、うちでは無理です。申し訳ございませんが…」

しかしその先生はあきらめず、またやって来ます。また断ります。またやって来ます。それでも断ります。

三回目の訪問のとき、大山さんを悩ませ、苦しませていることに、その先生も耐えられなくなったのでしょう、ついにあきらめたそうです。しかしそのとき、「せめてお願いを一つだけ」ということで、こんな申し出をしたそうです。

「大山さん、もう採用してくれとはお願いしません。でも、就職が無理なら、せめてあの子たちに働く体験だけでもさせてくれませんか？ そうでないとこの子たちは、働く喜び、働く幸せを知らないまま施設で死ぬまで暮らすことになってしまいます。私たち健常者よりは、平均的にはるかに寿命が短いんです」

頭を地面にこすりつけるようにお願いしている先生の姿に、大山さんは心を打たれました。「一週間だけ」ということで、障害をもつ二人の少女に就業体験をさせてあげることになったのです。

「私たちが面倒をみますから」

就業体験の話が決まると、喜んだのは子どもたちだけではありません。先生方はもちろん、ご父兄たちまでたいそう喜んだそうです。

会社は午前八時から午後五時まで。しかし、その子たちは雨の降る日も風の強い日も、毎日朝の七時に玄関に来ていたそうです。

お父さん、お母さん、さらには心配して先生までいっしょに送ってきたといいます。親御さんたちは夕方三時ぐらいになると「倒れていないか」「何か迷惑をかけていないか」と、遠くから見守っていたそうです。

そうして一週間がすぎ、就業体験が終わろうとしている前日のことです。

「お話があります」と、十数人の社員全員が大山さんを取り囲みました。

「あの子どもたち、明日で就業体験が終わってしまいます。どうか、大山さん、来年の四月一日から、あの子どもたちを正規の社員として採用してあげてください。あの二人の少女を、これっきりにするのではなくて、正社員として採用してください。もし、あの子どもたちにできないことがあるなら、私たちがみんなでカバーします。だから、どうか採用してあげてください」

これが私たちみんなの願い、つまり、総意だと言います。

社員みんなの心を動かすほど、その子どもたちは朝から終業時間まで、何しろ一生懸命働いていたのです。

仕事は簡単なラベル貼りでしたが、十時の休み時間、お昼休み、三時の休み時間にも、仕事に没頭して、手を休めようとしません。毎日背中を叩いて、「もう、お昼休みだよ」「もう今日は終わりだよ」と言われるまで一心不乱だったそうです。

ほんとうに幸せそうな顔をして、一生懸命仕事をしていたそうです。

誰でも何かの役に立ちたい

社員みんなの心に応えて、大山さんは少女たちを正社員として採用することにしました。

一人だけ採用ということはかわいそうだし、何よりも職場で一人ぼっちになってしまいやすいのではないかと、二人ならお互い助け合えるだろうということで、とりあえず二人に働いてもらうことになりました。

それ以来、障害者を少しずつ採用するようになっていきましたが、大山さんには、一つだけわからないことがありました。どう考えても、会社で毎日働くよりも施設でゆっくりのんびり暮らしたほうが幸せなのではないかと思えたのです。

なかなか言うことを聞いてくれず、ミスをしたときなどに「施設に帰すよ」と言うと、泣きながらいやがる障害者の気持ちが、はじめはわからなかったのです。

そんなとき、ある法事の席で一緒になった禅寺のお坊さんにその疑問を尋ねてみたそうです。

するとお坊さんは

「そんなことは当たり前でしょう。幸福とは、①人に愛されること、②人にほめられること、③人の役に立つこと、④人に必要とされることです。そのうちの②人にほめられること、③人の役に立つこと、そして④人に必要とされることは、施設では得られないでしょう。この三つの幸福は、働くことによって得られるのです」と教えてくれたそうです。

「その四つの幸せのなかの三つは、働くことを通じて実現できる幸せなんです。だから、どんな障害者の方でも、働きたいという気持ちがあるんですよ。施設のなかでのんびり楽しく、自宅でのんびり楽しく、テレビだけ見るのが幸せではないんです。真の幸せは働くことなんです」

普通に働いてきた大山さんにとって、それは目からウロコが落ちるような考え方でした。

これは、働いている多くの人たちも忘れてのことかもしれません。それを障害者の方によって教えられたのです。

——ということなんですね。

今ぼくはブログで本の紹介をやっているんですけど、結構ぼくの本の紹介はいいよということをよく言われるんです。100冊以上、本の紹介をしています。ただ、一つの本で2回に分けて紹介した本ってこの一つなんです。それだけぼくは感動しました。

出版社の方からも、ぼくのブログに「この本を紹介してもらってありがとうございます」とお礼が届きました。出版社も、この本を広めることによって日本をよくしたいんだということを言っていました。

そんなようなこともありまして、ちょうど一つの本にめぐり会って、本当にいま読んだところを読むと、今日は涙出なかったんですが、涙が出るんです。

そしてまた、ぼくのブログにこのことを書いて、ある外務省の職員さんも、ぼくのブログを見ながら涙がボロボロ出て、本をすぐ買いましたというようなことを言っているわけです。

(「人事を尽くして天命を待つ」続けるということが大事)

結局のところは、『論語』にあるように、修己治人といいですか、自分にすべては帰すんですね。だから、うまくいなくても、うまくいかないのはそれなりの理由が自分にもあるんです。そしてまた、どうにもできない運命的なものがあります。

それはそれでしょうがないんです。それはそれであきらめればいいんです。

「人事を尽くして天命を待つ」という言葉なんかもあります。そういう意味では、うまくいかなかったこと、具合が悪いときには、まずそれを人のせいにしたりしないで、自分は何か足りなかったんじゃないかということをお話して、そして努力してみたほうが、絶対に得だと思っただけですね。

ところが、今の風潮は、何でもかんでも人が悪いみたいな風潮になってしまう。能力がある人は、自分がうまくいって、評論的に世間が悪いとか社会が悪いと言うのはいいですよ。でも、そうでない、努力しないでうまくいかなかった人がその言葉を聞いた場合は、毒になると思っただけですね。そういう意味では、基本的にはやっぱり、自分で自分のことを努力して頑張らなきゃいけないし、またやれば未来は開けるということを……。

日本だってそんな悪い国じゃないし。

今度行ったヨーロッパのロンドンはそうですよ。

今年、ポンド、円に比べて半額になったそうです。250ポンドだったのが120～130ポンドになったらしいですよ。価値が半減になった。だから、経済、アメリカだけ問題になっていますけど、そうでない。ロンドンみたいなところもある。これからそういう意味じゃ経済も大変でしょうけど。

でも、その中でもうまくいっている人はいるわけで、うまくいっている人はそれなりに個人個人やっぱり努力しているということだと。そういう意味でも、今後ともはみんな一人一人、ぼくも含めて、努力していきたい。

そしてまた努力を継続していく。そうすると必ず実を結ぶし、それがうまくいく。続けるということは力であり、またそれが目的なんだ、と。

会社もそうですし、日本という国家も、続けていくことこそが、目的。

いいときも悪いときもある。

それを続けるということが大事なんじゃないかということをお話して、ちょうど時間になりました。

どうもありがとうございました（拍手）。

（おわり）